

映画字幕

REC

movie subtitles

外国の作品を字幕で見たことはあるだろうか。アメリカ映画やインド映画、フランス映画。様々な映画を見る際に生じる「言語の壁」を取っ払ってくれるのが字幕の存在である。今は吹き替えが普及したため、字幕で作品に触れる機会は若い世代では減ったと感じるが、依然として違う言語圏の作品を鑑賞するには欠かせないものとして定着している。その字幕はいつから付き、どのように制作されてきたのかを少し探っていく。

字幕が映画に付くより前の洋画が上映される際には、弁士と呼ばれる役職の人物が台詞の音を低くして日本語訳を喋ったり、スクリーンの横にテロップのようなものを写したりしていたそうだ。日本で洋画に初めて字幕がついたのは、アメリカで1930年に製作された『モロッコ』である。日本で公開されたのは1931年のことだった。元々ヒットが予想されていた作品で、この字幕の制作にあたって担当に選ばれたのは『キネマ旬報』の執筆もしていた田村幸彦。この時田村はまだ字幕制作が出来る工場が日本になかったことを理由に渡米し、現地で字幕を制作したそうだ。この字幕のついた『モロッコ』が大ヒットしたことで、更に数作の洋画が字幕を付けて公開された。この興行成績がかなり良かったことが決定打となり、これ以降、字幕を始めた会社の洋画作品の全てに字幕が付くことになる。

次に字幕の制作についてだが、字幕がいわゆる「翻訳」ではないことを字幕翻訳者である清水俊二氏は著書で語っている。何故かと言うと、字幕はあくまで映画のムードとセリフのニュアンスを傷つけないことが肝心だが、セリフの字数を客側が読み切れる程度までの制限があり、その上漢字を減らす方向性のため、当然訳にも限界が出てくるのだ。その国ならではの数多ある文化やジョーク、流行語の難しさ。もっと言えばそもそも訳する国の原語と日本語の強い語彙力を兼ね備えていて初めて字幕としての訳が成り立つ……字幕翻訳者の持つ技術は凄まじいと、探れば探るほど痛感を禁じ得なかった。これらを知った今、改めて私もとい読者の方の字幕付き洋画を見る楽しみが一つ増えたと言えるのではないだろうか。() *9, 10

映画の広告といえば、何を思い浮かべますか？ ポスターでしょうか？ それともコマースシャルやテレビ番組内での宣伝？

映画の広告として初めて使われたのはポスターです。ポスターには集客アップや認知度向上などの効果と、観客の映画に対する期待感のアップなどの役割があります。映画を見るきっかけを問うアンケートでは、「ポスターや看板」という回答は極めて少なくなっており、多くの人が映像広告である「コマースシャルや番組内での宣伝」と回答しているようです。確かに映像広告の方が、映画の内容が伝わりやすいかもしれませんが、ポスターには特有の良さがあると思うター広告は、ただの宣伝だけられています。

ポスターは、19世紀の中頃に発展し、ポスターの商品広告ようになっていきます。しかし、芸術的なものではなく、今のもの



そんな中、画家によってデザインされるポスターは催し物（サーカスや演劇、映画など）の分野が最も多く、宣伝すべき内容と関連して芸術的と言えるものが多く見られました。ポスターのほとんどは会社が所有していて、個人が所有している例は少なかったのですが、徐々に映画ポスターに情熱的な人も増えたため、大手オークションによる定期的な競売も行われるようになりました。

映画のポスターからは、主演俳優の扱い、魅力、そして、映画や映画ポスターを見る人達の反応でその人の青春時代も分かると、ある映画評論家が言います。一時期テレビ世代が誕生し、大衆が劇場映画を見限ったように、映画ポスター芸術も衰えましたが、現在、映画ポスターへの関心は凄まじい勢いで復活しています。豊かで多様性に富んでいる、貴重だと評価されるようになってきたのです。() *11, 12



『2023年 映画の旅』

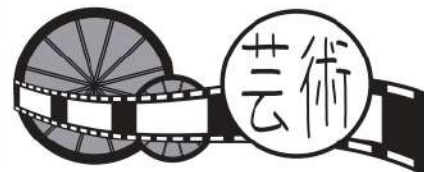
監修： 、 、

制作：月寒高校図書局

今回の『らいぶらりい』では映画をテーマに、映画を構成するさまざまな要素についてお伝えしてきた。たった百年ほどのともすれば短い歴史の中で、著しい発展を遂げた映画。初めはモノクロ映像のみだったが、やがて音を手に入れ、色を身に付け……絶えず進化を続けその世界を拡張していった。映画の成長は今なお留まるどころを知らず、その全貌は計り知れない。今回お伝えした内容も、映画という巨大な氷山の一角の表層に過ぎないのだろう。

それでも、読者の方に映画の新たな一面をお伝えすることができたらそれで十分だ。この館報をきっかけとして、映画の世界へ一歩を踏み出してくれたのなら、尚のこと幸いである。だが、踏み出してくれなくても構わない。映画は、何か特別な知識が無くとも楽しめるものなのだから。()

～ Fin ～



皆さん、映画の旅を楽しんで頂いているでしょうか。ここでは、芸術作品としての映画について、私が普段感じていることを書いていこうと思います。映画は、構図や小道具等の美術的な面から、主題歌・背景音楽などの音楽的な面との、複合的な芸術作品です。私はギターを弾いたり絵を描いたりといったことを趣味としているのですが、複数のツールで芸術に触れていると感じるのが映画の独自性。映像作品としての表現が目立って見えます。

私が絵を描く時には、その情景の前後を感じさせようとして描き、複数のことを一つの場面に凝縮しようとしています。また、音楽では音の連なりを扱うので、次の音との繋がりと展開を考えて演奏します。それらの要素が合わさった映画で生まれるのは、展開に合わせた情報の整理がされた、ゆとりのあるリアルな空気感。そんな空気感を感じることが私の映画の楽しみの一つです。旅の楽しみの一つにはその土地の空気を楽しむということがありますが、皆さんはどうでしょうか。皆さんの旅が楽しいものとなることを祈って。()

参考文献 (文末の*と対応)

- *1『映像の歴史哲学』
多木浩二 著／今福龍太 編
／みすず書房
- *2『ニューメディアの言語』
レフ・マノヴィッチ 著／堀潤之 訳
／みすず書房
- *3『映画を早送りで観る人たち』
稲田豊史 著／光文社新書
- *4『ハリウッド式 映画制作の流儀』
リンダ・シーガー 著
／シカ・マッケンジー 訳
／フィルムアート社
- *5『興行 価値商品としての映画論』
大高宏雄 著／鹿砦社
- *6『スピーカー技術の100年』
佐伯多門 著／誠文堂新光社
- *7『映画館のまわし者』
荒島晃宏 著／近代映画社
- *8『ほっかいどう映画館グラフィティ』
和田由美 北の映像ミュージアム 著
／浦田久 画／亜璃西社
- *9『Keep on Dreaming』
戸田奈津子 金子裕子 著／双葉社
- *10『映画字幕は翻訳ではない』
清水俊二 著／戸田奈津子 上野たま子 編
／早川書房
- *11『映画100年ポスターアート80選』
匠秀夫、淀川長治ほか 著
／グラフィック企画
- *12『現代広告論』
岸志津江 田中洋 嶋村和恵 著／有斐閣